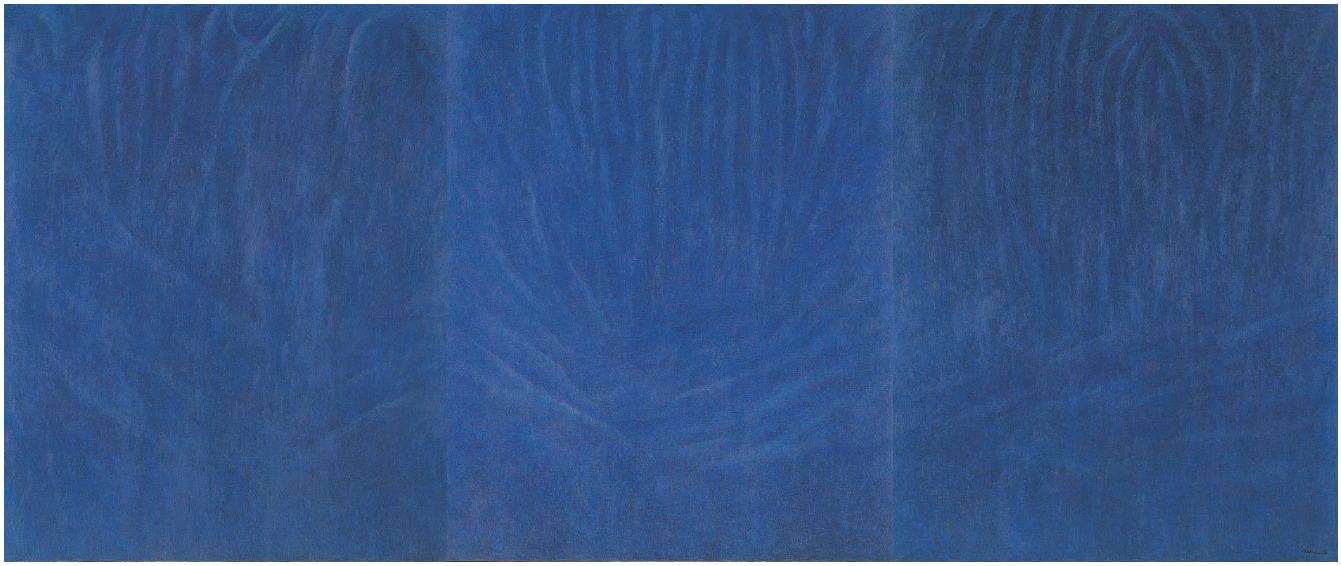
PRESS RELEASE

"日本とは何か" それ以前の "人間とは何か" をあらためて根底から問い直すところから私の戦後は始まった。



寺田小太郎
いのちの記録

コレクションよ、永遠に

展覧会名	寺田小太郎 いのちの記録 ーコレクションよ、永遠に【前編】「起源」
会期	【前編】2021 年 7 月 10 日（土）～ 9 月 20 日（月・祝）
主催	多摩美術大学美術館
出品協力	東京オペラシティ アートギャラリー、府中市美術館、早稲田大学 會津八一記念博物館
場所	〒 206-0033 東京都多摩市落合 1-33-1
交通	多摩センター駅 徒歩 7 分（京王相模原線・小田急多摩線・多摩モノレール）
開館時間	10:00 ～ 17:00（入館は 16:30 まで）
休館日	火曜日
入館料	一般 300 円 (200 円) ※(　) は 20 名以上の団体料金 ※障がい者および付添者、学生以下は無料
公式サイト	https://museum.tamabi.ac.jp
Twitter	https://twitter.com/tamabi_museum
Youtube	https://www.youtube.com/channel/UCOvu6kaJ1sP0QXut4RBKr7g

2021 年 7/10（土）→ 9/20（月・祝）　多摩美術大学美術館　―――――― 前編「起源」

企画趣意

2019 年度、多摩美術大学美術館は故・寺田小太郎氏（1927–2018）より 59 点の美術作品を受贈いたしました。これを記念し、展覧会を開催いたします。
東京オペラシティビル（西新宿）地権者の一人であった寺田氏は、新国立劇場建設に伴う都市開発プロジェクトに参画し、美術館創設を目指して大きな推進力となりました。寺田氏が夢見た美術館のために収集された作品は、現在の東京オペラシティ アートギャラリーで「寺田コレクション」として公開され、都市における芸術文化の振興と発展に大きく貢献しています。全国各地の美術館にも寄贈された寺田コレクションは、現在総数約 4,500 点に上り、難波田龍起・史男の国内屈指となる作品群として知られるほか、戦後日本美術から日韓現代アートに至るまで幅広い年代・ジャンルにわたります。

前編 / 後編の 2 期にわたる本展では、当館収蔵品を含む約 190 点の作品群と資料から、寺田氏の思いに寄り添いその人物像を浮かび上がらせるとともに、寺田コレクションに込められた「物語（ナラティブ）」をひもときます。また寺田氏が長年携わった「造園」の仕事にも光を当て、そこで育まれた自然観・美的感性と収集活動との相関について探っていきます。

前編「起源」

寺田コレクションには、戦争を経験して生成された〝日本とは何か〟〝人間とは何か〟という 2 つの問題意識が投影されています。戦前 / 戦後における価値観の大きな転換に対峙した寺田は、美術作品を通じて自らのアイデンティティの拠りどころを探っていきました。本展【前編】ではコレクションの原点にさかのぼり、寺田コレクションを語るうえで欠かせない難波田龍起・史男の作品、そして「東洋的抽象」「ブラック & ホワイト」「日本的なるもの」といった収集テーマから、寺田の感性と美意識のルーツを辿ります。

寺田小太郎プロフィール

1. 相笠昌義
《トップルームの寺田さん》1999 年

寺田小太郎（Kotaro Terada）

1927（昭和 2）年 5 月 7 日、滋賀近江の商人を出自とし、江戸に移って約 500 年続く寺田家の長男として生まれる。

東京農業大学緑地土木科（現造園科学科）および同大学農学部農業経済学科出身。1963 年から東京農業大学の恩師・中島健（1914-2000）の誘いを受けて綜合庭園研究室に勤務し、造園の仕事に携わる。造園の仕事は寺田にとって「天職」となった。1980（昭和 55）年に綜合庭園研究室から独立し、創造園事務所を設立。中島とともに東京オペラシティビルの植栽・管理を行った。

1988 年、新国立劇場建設のため官民一体となった都市開発事業が開始され、寺田は所有していた土地を提供し、本プロジェクトに唯一の個人として参画する。行政が掲げた文化施設を設置するプランに賛同したうえで、美術館創設（現在の東京オペラシティアートギャラリー）を提案し、私財を投じて美術館創設に向けて収集活動を開始した。

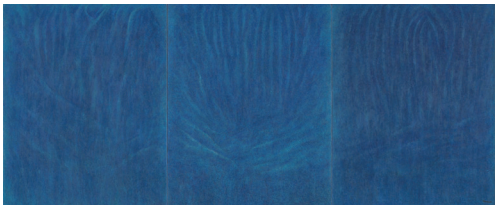
2018（平成 30）年 11 月 18 日、逝去。

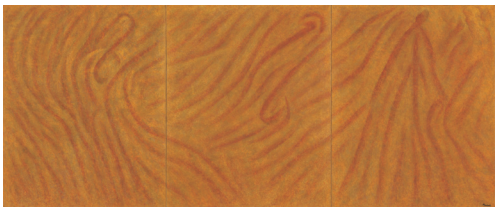
展示構成

１章　出会い 難波田龍起・史男

寺田が収集した難波田龍起および次男・難波田史男の作品群は 600 点に上り、国内随一といえるコレクションです。1989 年の難波田龍起の個展「石窟の時間」で寺田は大きな衝撃を受け、その場に展示されていたほぼ全ての水彩画 50 点をまとめて購入したことが、本格的な収集活動の始まりでした。龍起の作品群は幅広い年代を網羅しており、戦前の具象画から戦後に豊かな展開をみせる抽象画、そして晩年の大作「生の記録」シリーズまで、画風の変遷を俯瞰できます。寺田と龍起の出会いを美術館創設に向けた「寺田コレクション」形成の起点と捉え、コレクターと画家の魂の共振を起こした作品群に触れていきます。
本展は、寺田コレクション草創期と深く関わっている難波田龍起《生の記録３》《生の記録４》が同時に展示される貴重な機会となります。《生の記録４》の制作秘話とともに、寺田と龍起の芸術的交流に迫るエピソードをご紹介いたします。

出品作家
難波田龍起　難波田史男


2. 難波田龍起《生の記録 3》1994 年

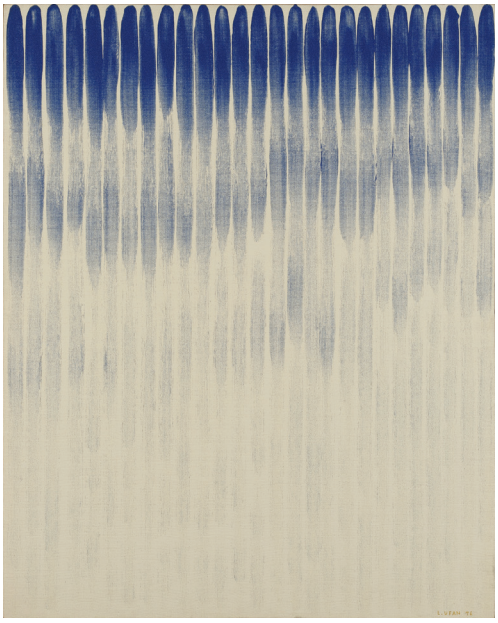

3. 難波田龍起《生の記録 4》1994 年

4. 難波田史男《自己とのたたかいの日々 N-14》1961 年

２章 「日本的抽象」から「東洋的抽象」へ

寺田の関心は日本の抽象美術から「東洋的抽象」という収集テーマへと繋がり、日本の文化形成に大きな影響を与えたとする韓国の作家による抽象画の収集へとつながりました。第二次世界大戦後、「アンフォルメル」や「抽象表現主義」といった美術運動が欧米を中心にダイナミックな展開を見せていた時代、1970 年代の韓国では表現を極限まで切り詰めた「単色画（ダンセッファ）」が生み出されました。韓国独自の表現は同時代の日本美術の動向「具体」や「もの派」と並んで豊かに発展し、その潮流は現代にも続いています。欧米の同時代美術に影響を受けつつも、自国の文化的ルーツを探究して新しい表現を希求した東洋の画家たちの衝動を、彼らと同時代を生きた寺田の視点と重ね合わせて見ていきます。

出品作家
白髪一雄　山口長男　李禹煥　尹亨根　柿崎兆
野見山暁治　前田昌良　郭仁植
崔恩景　榎倉康二　吉澤美香　野田裕示　堂本右美
尹熙倉


5. 李禹煥《線より》1976 年

展示構成

3章　ブラック＆ホワイト 表現と非表現

寺田は「ブラック＆ホワイト」という収集テーマを掲げ、モノクロームの作品群を収集しました。この背景には、戦後の高度経済成長期に生活が急激な変化を遂げ日常に色彩があふれていく反動で、モノクロの世界がかえって美しく感じられるようになったという寺田の個人的体験がありました。また色彩を抑え物語性・表象性を排除した表現は、筆致や線描を引き立て、時に素材の持つマテリアリティをも浮かび上がらせます。ここではモノクロームの作品群を通して、「人為（＝わざ）」と「自然（＝素材）」が拮抗する瞬間、あるいは「表現（＝つくること）と非表現（＝つくらないこと）が照応」することで無限に広がる表現世界を提示します。

出品作家
チャールズ・ランフ　アド・ラインハート　桑山忠明
松谷武判　ベン・ニコルソン
鄭相和　村上友晴　白髪一雄　李禹煥　赤塚祐二
磯見輝夫

6. 白髪一雄《貫流》1973 年

7. 松谷武判《雫》1985 年

4章　わが山河 故郷への旅路

寺田コレクションには日本の風土や自然、原風景を描いた作品が数多く存在します。寺田は幼い頃から自然を愛し、造園家の仕事を通じて日本の風土・自然に対して愛と畏敬の念を育んできました。寺田が造園の仕事に従事した 1960 年代～ 1990 年代初頭の高度経済成長期からバブル崩壊前後にかけては、日本の暮らしと景観が大きく変容した時代です。国木田独歩『武蔵野』や徳冨蘆花『みみずのたはこと』の書物を愛読していた寺田は、経済優先による自然破壊とそれ伴う日本人の精神の荒廃を憂い、里山のような人と自然の営みが一体となった景観や日本の原風景を自らの心の拠り所としていました。本章では、近代化を通して失われつつある景観の中に、コレクターが培った美意識の源流を探ります。

出品作家
中路融人　麻田浩　有元容子　中村徹　小泉淳作
齋藤満栄　奥村美佳　伊藤彬
松本祐子　稗田一穂

8. 麻田浩《御滝図（兄に）》1990 年

9. 稗田一穂《燿く大空の月》2017 年

本展の見どころ－前編「起源」後編「継承」を通して

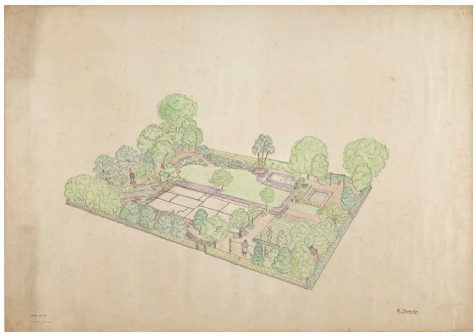
1　コレクターの知られざる一面
造園家としての仕事を紹介。

寺田は芸術作品を集める活動を、「庭づくり」の延長にある「創造的な営み」であると表しました。本展では、寺田が美術品収集を始める以前から、造園家の仕事に従事してきた経歴に着目します。初公開となる寺田直筆の庭園見取り図や寺田が関わった庭園写真などをご紹介し、寺田独自の自然観と収集活動との連関を探ります。

コレクションは造園と同じで、
既存の物を集めたり組み合わせていくことで新しい世界を創り出していく。
コレクションするということも創造的な営みではないかと思います。
（寺田小太郎）

出典：「ひと　東京オペラシティアートギャラリー名誉館長 寺田小太郎さん」『月刊美術』290 号、サン・アート、1999 年 11 月、p.107

T 邸庭園　施工：綜合庭園研究室　撮影：杉山薫



10.「東京農業大学在学時の寺田小太郎による庭園見取り図」　1946 年

2　「表現行為 / 創造としての収集活動」とは？

寺田は生前、コレクションという行為そのものを「創造／表現行為としての収集活動」として捉え、自身の美術コレクションを多くの人々の鑑賞に供し、作品鑑賞を通して見る人と共に思考を巡らせることを願いました。寺田コレクションは、時に開かれたオープンエンドな問いかけとして、社会・そして未来へ向けられました。社会全体が様々な課題を抱え未来を見据える結節点にある今、私たちはあらためて人間にとって普遍的な価値とは何かを問い直す必要に迫られています。寺田コレクションは、人の心を満たす豊かな社会を創りあげる手段としての芸術と、「コレクション」という営みの可能性について新たなる地平を拓いてくれるでしょう。

3　現代における「個人コレクター」の
社会的役割を再考。

Series: コレクターズ /Collectors
「収集」の域を超えて芸術との関わりを生み、自らの志を波動として周囲へ影響を与えるような「コレクター」たちがいます。作家を支えつつ社会へ芸術の息吹を送る彼らは、将来アートシーンで活躍するであろう美術大学の学生にとっても重要な存在といえるでしょう。本シリーズでは、作品収集の背景にあるコレクターのまなざしや個人のライフストーリーを辿りながら、収集という行為そのものが社会をより充実させるための営みであると捉えることで、「社会におけるコレクターが果たす役割」を再考します。本展はその第 2 回目です。

関連イベント

●ゲスト・トーク

①會津八一記念博物館の寺田コレクション

7 月 17 日（土）14:00 ～

玉井貴子氏
（早稲田大学 會津八一記念博物館 学芸員）

②寺田コレクション形成の軌跡

8 月 21 日（土）14:00 ～

福士理氏
（東京オペラシティ アートギャラリー シニア・キュレーター）

※事前申し込み制

●キュレーターズ・トーク

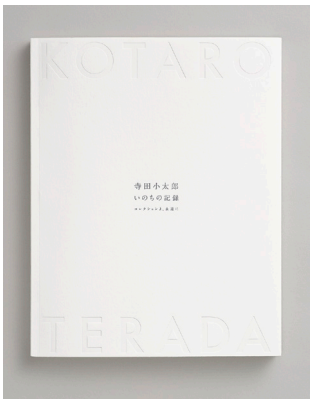
企画担当者による展示解説
※当日会場にて受付

会場：多摩美術大学美術館　B1 多目的室
参加費：無料（ただし、入館料が必要です）
各回＝定員 20 名（定員に達し次第受付終了）
事前申し込みが必要なイベントにつきましては、当館 HP よりお申し込みください。

展覧会カタログ

『寺田小太郎　いのちの記録　－コレクションよ、永遠に』
2021 年 7 月 10 日 刊行予定／ 24.0 × 18.7cm ／ 272 ページ（予定）

本展作品図版約 190 点掲載。寺田小太郎による随筆『わが山河』（私家版）を再録掲載するほか、生前の寺田と親交を結んだ 2 人の画家 相笠昌義・奥山民枝 、造園家・中島健主宰の綜合庭園研究室 OB へのインタビュー、多摩美術大学美術館館長・鶴岡真弓の書き下ろしテキストなどを収録。



次回予告

後編「継承」　2021 年 10/2（土）→ 11/21（日）

寺田は「芸術には人を変容させる」力があるという信念を持って収集活動を行い、作品やアーティストとの出会いとともに自らの思考を深化させていきます。そして寺田は収集活動を「創造的な営み」と考え、そのプロセスを通じて自分の想いを表現しようと試み、自らが生きた証となるコレクションを未来へ伝えようとしました。本展【後編】では、寺田から私たちへ受け継ぐメッセージを「人間とは何か」「幻想美術」「自然の声」「センス・オブ・ワンダー」というテーマに込めて構成し、寺田のまなざしの先にある未来へ想いを馳せていきます。
本展は前編・後編で 1 つの「物語」を構成しています。ぜひ併せてご覧ください。

お願い
新型コロナウイルスの拡大・収束状況により、開催状況およびイベント内容が変更となる場合もございます。
随時、多摩美術大学美術館の HP または Twitter にてお知らせいたしますので、ご確認くださいませ。

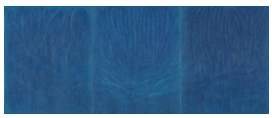
画像請求書

広報用図版として10点をご用意しております。画像掲載をご希望のかたは必要事項をご記入の上、画像番号に◯をつけて、FAX またはメールにてお送りください。

【諸注意】
①掲載時は作家名・タイトル・フォトクレジット等を必ず表記ください。トリミング、文字載せはお控えください。
②記事をご掲載いただく場合には、情報確認のため校正原稿をお送りください。
③アーカイヴのため、掲載誌（紙）、URL 等をお送りいただけますと幸いです。
以上、ご理解・ご協力のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

1

相笠昌義《トップルームの寺田さん》1999 年
油彩、キャンバス
東京オペラシティ アートギャラリー蔵
撮影：武藤滋生

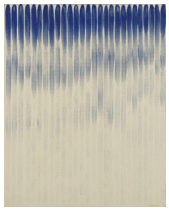
2

難波田龍起《生の記録 3》1994 年
油彩、キャンバス
東京オペラシティ アートギャラリー蔵
撮影：若林亮二

3

難波田龍起《生の記録 4》1994 年
油彩、キャンバス
東京オペラシティ アートギャラリー蔵
撮影：若林亮二

4

難波田史男《自己とのたたかいの日々 N-14》
1961 年
水彩、インク、紙
東京オペラシティ アートギャラリー蔵
撮影：斉藤新

5

李禹煥《線より》1976 年
岩絵具、膠、キャンバス
東京オペラシティ アートギャラリー蔵
撮影：早川宏一

6

白髪一雄《貫流》1973 年
油彩、キャンバス
東京オペラシティ アートギャラリー蔵
撮影：早川宏一

7

松谷武判《雫》1985 年
ミクストメディア、紙
東京オペラシティ アートギャラリー蔵
撮影：斉藤新

8

麻田浩《御滝図（兄に）》1990 年
油彩、キャンバス
東京オペラシティ アートギャラリー蔵
撮影：斉藤新

9

稗田一穂《燿く大空の月》2017 年
胡粉、岩絵具、墨、金泥、麻紙
多摩美術大学美術館蔵
撮影：若林亮二

10

「東京農業大学在学時の寺田小太郎による
庭園見取り図」
1946 年
個人蔵
撮影：若林亮二

媒体名：
発売・掲載・放映日：
御社名（ご担当者名）：
E メールアドレス：
ご連絡先（電話・E-mail）：

お問い合わせ：
担当学芸員　渡辺眞弓
E-mail：museum@tamabi.ac.jp
TEL：042-357-1251
FAX：042-357-1252